

# 戦士は土の下でも なお詩を続ける



69戦士 糟谷同志追悼講演集



1947年8月8日 兵庫県加古川市で生れる  
加古川市高砂市組合立宝田中学卒 兵庫県立加古川東高校卒  
1968年4月 岡山大学法文学部法科入学  
遺族（父光男さん、母孝江さん）は兵庫県加古川市米田町船元に居住

## 糟谷 孝幸君のことば

情況の中で苦悩する

己自身を見つめる時程

むなしなものはない。

自己保身にのみすがりついて

閉塞状態におちいつている。

我々にとってではなく

僕にとっての「未来」は何であるのか、

我々にとっての「未来」は

我々の後に続いてくれる

「誰か」があるということなのか。

10・21の大阪は

静かな葬式行列ではなかったのか。

参加したもの、あるいは

秘かに期待を寄せていたものの

全てを——裏切った。

消耗しない方がおかしいではないか。

僕は——政治的人間になる——ことはできない。

でも、僕を含めて消耗した人達を

その苦悩から救ってやるには

ぜひ、11・13に

何か佐藤訪米阻止に向けての

起爆剤が必要なのだ。

犠牲になれというのか。

犠牲ではないのだ。

それが、僕が人間として

生きることが可能な唯一の道なのだ。

抑圧する者——全てに——災いあれ!!

一九六九・一一・八

# 目次

はじめに	1
国際主義と結びついた自前の大義の創造を 通して糟谷君を追悼し続ける 兼実行委員会代表 <b>上条正雄</b>	
資料 1	6
あいさつ	9
糟谷君虐殺下手人 - 荒木・赤松・杉山 を必ず追いつめ三警官に有罪 の烙印を焼きつけよ 告発と推進する会 事務局長 <b>宮田雅弘</b>	
追悼講演	
I. 破邪顕正 受難者 = 戸村一作	17
糟谷孝幸を想う <b>前田俊彦</b>	
II. 裸で生と死とむきあうなかで貨幣の 呪縛を打ち破る共同の知性を創り出そう <b>花崎泉平</b>	25
資料 2	46
III. 人民の解放と革命主体形成の指導的核 新しい革命党の建設を闘いとう <b>白川真澄</b>	49
特別寄稿	
糟谷孝幸同志が投げかけたもの ろく青同三里塚現闘団	56
アピール	
ろレタリア青年同盟	65
資料 3	67

(注. 特別寄稿は、福岡集会でのあいさつを掲載しました。)

## 国際主義と結びついた自前の大義の 創造を通して糟谷君を追悼し続ける

上条正雄「12・11集会実  
行委員会代表」

地で、その闘いの、詩、を詩いつづけた。

糟谷の闘った一九六九年とはどんな時代であったか。

それはインドシナの一小国ベトナムが、世界最大、最  
強を自認するアメリカ帝国主義の政治・軍事・経済支配  
を打ち破りつつある時代であった。

ベトナム革命は、ヨーロッパ・アメリカ・日本の若者  
の心をつきまじこかし、全世界で激しい反体制運動が広範  
な大衆に支えられ爆発し、同時に、アフリカ南部を中心  
とする第三世界解放革命が加速度をまして南アフリカ共  
和国と南アフリカを追いつめてゆく時代であった。

ベトナム革命が日本の民衆につきつけたもの——それ  
は日帝公民である我々が実は、ベトナムを含めた第三世

一九七七年岩山大鉄塔の抜きうち撤去に怒りを爆発さ

せ、五月八日、実力闘争にたちあがった三里塚戦士の間

で、「糟谷のように闘おう」「ベトナムのように闘おう」

が合言葉となって三里塚の大地にこたえました。この五

八戦闘こそ翌七八年の管制塔破壊を頂点とする三里塚三

・二六の大勝利の突破口をなした戦いであった。

この日、わが共労党、ろく青同、先鋒隊の戦士の胸の  
中で糟谷孝幸は生きかえった。糟谷が倒れて七年が経過  
していた。戦士は土の下でもなお詩に続ける。——六  
九年十一月二二扇町戦闘で虐殺された糟谷は三里塚の大

界支配に組み込まれている現実への反省であり、大義を掲げ闘う人民の攻撃精神の偉大さであった。

当時、国際連帯は、ベトナム革命連帯を基軸として極めて具体的現実的なものであり、それなしにはあらゆる他の戦線での活動をもたすまじき輝きを失ったものであった。

総評は、ベトナム反戦連帯ストを10・22に実行し、三里塚闘争は「ベトナム侵略軍事空港」粉砕として位置付けられ、日本共産党でさえ、一日分の賃金をベトナムへ、という大カンパ活動をを行い、何億もの資金・物資をベトナムに送った。街頭に繰り出した数十万の労働者、学生、市民にとって、ベトナムは決してどこか遠い南の国としてではなく、最も身近に感じられる具体的な存在であった。

このとき、日本人民の革命事業の核心的内容の一つが明白となった。

それは、自らが第三世界の支配・抑圧・収奪の担いで

ム、イランを含めた第三世界の今日の革命の現実が示しているとおりである。

第三世界の完全解放なしに帝国主義の最後の打倒もあり得ない。第三世界革命との合流なしには帝国主義の良のつくり変えも社会主義国の変革もありえない。

ヨーロッパナショナリズム・日帝ナショナリズムこそ侵略・差別・抑圧・融和主義の元締めであり、世界の闘う人民の共通の敵であるという事実是不動である。

2.

今、世界的に対ソ脅威が叫ばれ、日帝も環太平洋圏構想から総合安保体制確立をめざしてなり振りかまわぬ強行策に出ている時、対ソ戦略・自衛隊増強とは、実は第三世界戦略であるのこそを自れば、国際連帯闘争と総合安保粉砕の闘いは一つのものであり、それが第三世界の未来に關つてきていることも明らかであろう。

偉大な戦闘は、偉大な人民を生みだす。糟谷孝幸は「

あるという地位から解放され、第三世界人民と帝国主義公民たるわれわれとの分裂、敵対を止揚することである。「第三世界解放革命との結合・合流」は、かくて提返された。

日本人民の闘いを照らし出した光の根源であったベトナム連帯を中心とする国際連帯闘争はその後の一九七五年四月三〇日、全土解放（を）はさこんで急速にその威力を減退せしめた。これは七〇年代中期のキーセン観光粉砕対韓優出企業弾劾闘争のはなやかな登場と急速な退潮とも深い関わりをもっている。日本人民は第三世界の連帯すべき相手を急速に見失ってしまったのだ。

だが抑圧国と被抑圧国の関係・ヨーロッパ（米・日を含む）帝国主義が、第三世界支配・抑圧・貧困化しているという現実にいよいよかの変革が生じたのであるのか。

たしかに第三世界は着実に一歩一歩その革命の道程を推し進めている。だが一国の政治・軍事的解放がその国の完全解放を意味するものではないことは、中国、ベトナム

犠牲になれというのか。犠牲ではないのだ。それが、僕が人間として生きることが可能な唯一の道なのだ」と書き残した。

この同じ思想を一九七七年から七八年の春にかけてあいつく三里塚大戦闘のなかでわれわれは再び共有することができた。

だが、今とわれていることは、偉大な戦闘のときに偉大な戦士となることができることも、日常的な非革命的な時期に革命精神を失す、偉大な戦士でありつづけることである。この点で、わが共労党もまた重大な試練に出会ってきた。この六九闘争直後の大量の脱落と転向、そして、七一年の党分裂。三里塚大戦闘を経て、二年近くの今日、六九年当時に比べて思想的には飛躍的に前進してきた。わが隊列の中からは、たしかに獄中闘争を黙否、非転向で全員が闘い抜いたというすばらしい成果をもちつつも、他方では、一部であるがけっして無視することのできない脱落・転向・腐敗が発生してきている。

偉大な戦闘の時期が終り、次の大飛躍に向けて一進一退しながらの準備の時期に、ある同志は活動の日常性のなかに大義を見つけたら、あいまになつたりしてきている。活動の形式的な側面だけがいやに目につき、今の闘いと生活が何か真実味のないものに感じられ、闘いとは別のところに何かほんものらしいものがあるのではなにかと幻想したりする。

つまり、今の自分の闘いと生活を大切にしなければ、生活の質と思想が空洞化し形骸化するこゝへの痛丹がとれ、個性化し軽くなつてしまふ。そこでは、大義は自分の外にある大切なものではあるが、自分のものとは何か抽象的な関係であり、自己の内面世界の深いところではすでに崩壊しかかつていゝものとなつてゐる。だが、大義は第三世界や第三国境から自動的によそられるものではなから、自己との闘いの中で、自己が獲得し蓄積するものといふのである。

をも消費としてのみみるゝ生活の空洞化さをおかしいと感じなくなる。大義は自己と闘い、社会と闘い権力と闘つて創造して行くものなのである。

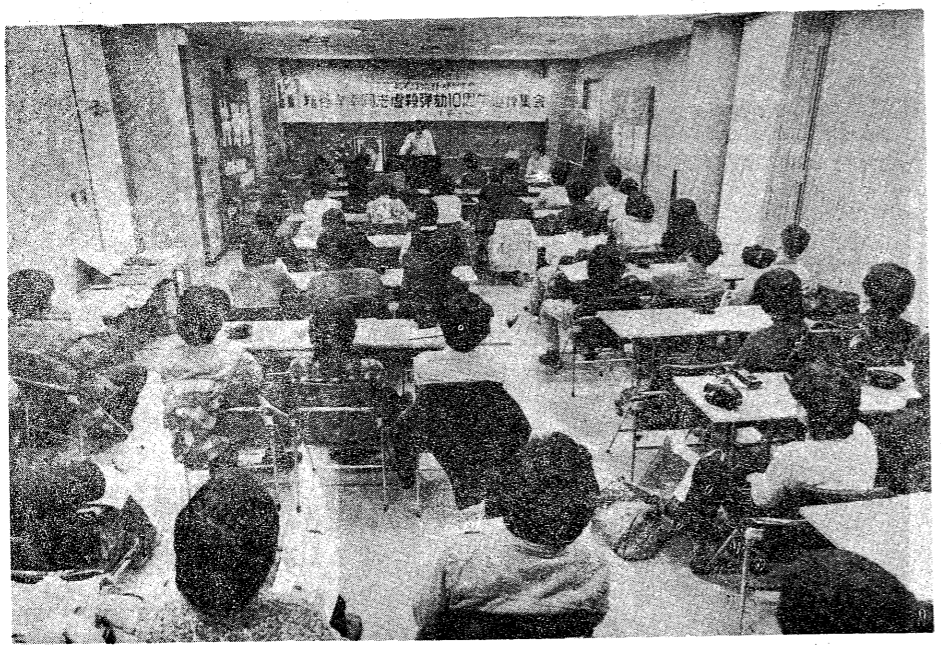
糟谷を追悼し、「糟谷のように闘おう」とするならばベトナム革命が突き出し、われわれが「第三世界解放革命と結合・合流しよう」と受けとめたもの、糟谷の思想が突き出し、われわれが偉大な戦闘のときも、日常生活のなかでも、大義を不断に創造し発展させることについてとめたもので、より深くより日常的に、より路線的に突きあげてゆくふだんの努力が必要となつてゐる。



3.

日本は、第三世界に対して専制的な抑圧者でありながら、日本の特異な一國主義的政治過程が、この抑圧を抑圧と感じさせなく作用してきた。ゆゑに、国際連帯も三里塚闘争も共に大義を育てるためには「一瞬の油断なく闘い求めつづけなければ、たちまち自然発生的な排外主義——自ら剣をまめがれ、気ままに快適に暮せばこゝたけるとする——におちいつてしまふ。大義は何かしら自分たちの努力と無関係に、あるのではなく日々うちたてるものである。

戦後高度経済成長が、どれほどの第三世界人民の飢餓と犠牲のうえになつたか。物と人間関係を一つ一つ創造してゆくよりも既成のものだけ代行させ消費させてゆくなかで創造してゆくことが「面倒なこと」「ムダなこと」と思ひこまされ、一見合理的な繁栄社会に慣れ親しみ、あらゆる面で既製の商品や消費するの文化



糺谷孝幸同志を虐殺を伝ふる商業紙

大阪の11・13デー

### 機動隊と衝突、頭部負傷

## 岡山大生が死ぬ



死んだ糺谷君

【大阪毎日電】大阪府大生が、11月13日午後、大阪府警機動隊と衝突し、頭部を負傷し、翌14日午後、同府立総合医療センターで死亡した。死因は頭部損傷による出血性脳挫傷と診断された。機動隊は、大生らが機動隊の警備行動に協力しないとして、強硬な対応を取ったと主張している。

### 買物袋でミニ娯

## 女子大生が運び屋

女子の火炎ビン手渡す

【大阪毎日電】大阪府警が、11月13日午後、大阪府立総合医療センターで死亡した大生の死因を、頭部損傷による出血性脳挫傷と診断した。大生は、機動隊と衝突した際に、買物袋でミニ娯を運び、火炎ビンを手渡したとされている。

あす10万人集会  
全園で約百カ所  
共産系団体が抗議集会  
東京で同万人  
機動隊のリンチだ  
非暴力論



11・13刑事公判斗争であいさつをする69秋期共産系被告団(1974)

## 同志糺谷虐殺に

昭和44年(1969年)11月24日



12.1 統一



12.8 統一

## 同志糺谷の遺影を

岡山人民義 一人一人の闘争宣言



12.8 統一

## 警棒による虐

今年秋決戦の敗北から70年プロレタリア闘争

糺谷君虐殺を弾劾する「統一



あいさつ

# 糟谷君虐殺下手人 荻・松を必ず追いつめ

## 三警官に有罪の烙印を焼きつけたい

宮田雅弘「糟谷孝幸君虐殺事件告発を推進する会 事務局長」

### 死者を踏みこむべきでない 告発する

ただいま御紹介を致しました。糟谷孝幸君虐殺事件告発を推進する会の事務局長を兼ねておられます宮田雅弘氏。

唯一人の代表の佐藤耕造氏ですが、現在小倉の方にあります。この方へは来られませんので、代って御挨拶を申し上げます。

皆さん、御存知のようにこの演壇の（前に）糟谷君の写真があるわけですが、左の方に、左側部から田村田にかけて入っております。メクラに下に流れておると言う写真

が目に留まるように思われます。

この写真が（この写真）である。当時一九六九年二月五日の朝刊には、一部の新聞ではこの写真が掲載された。しかし以降は権力のまきかえしによって、この写真はスクロミの紙上からは消えました。それにかわって、糟谷君の眼鏡をかけた、そういう意味でいえば溫和なやうい顔が二つ出るといふことがあります。

すなわちこの二つと（この）権力は当初から糟谷君の虐殺した上には、もう一度、死者を踏みこむ行為を繰り返していった。たしかに、今の法と受けとめ、三警官を告発しました。







すけれども、七年で、終えようということ、一九七六年の六月に、最後の審議を終えます。

で、それに対して、一九七六年九月十四日に、大阪地裁で、残念ながら棄却決定される。更に我々は、異議を申し立てて大阪高裁に、抗告を申し立てる。それが、十月一日です。

そうすると、ただちにです。十月二日に、抗告をしないでですね、それに文書をたたくん出しているわけですから、読むだけでも、時向がかかりますし、裁判所というのは、一つの事件だけを扱って、他の事件は別の日でなければ、ただちに、十月二日大阪高裁で、棄却するという決定がなされてしまった訳です。

で、その決定が出された後でも、僕達、被告団は、糟谷の付審判闘争が、結着するまで、我々被告団の場合は、一九七四年だから、闘争以来五年で、大阪地裁で結着します。

凶器準備集合罪から、公務執行妨害、凶器準備結集幫

ところが、その後「いうまでもないが、本件では、被告人の場合、死者が出たほか、警察側には、検察官が起訴の必要を認めるほどの傷害がなかったこと」即ち、傷害罪などがついていないことですね。

「本件犯行後すでに四年六ヶ月ばかりの年月が経過し等々の理由をあげてくるわけですが、今、やっぱり大きなのは、被告人の場合、死者が出たほかということですね。だから、そこで我々一、二被告団は、糟谷君が虐殺されたということを一審で、そのおかげということらおかしんですけれども、そのことによつて、執行猶予つきで全員が一審で終結をした。

特に検察側も、一審から二審へ抗告しようと考えていたと思えますけれども僕達が非常に、一、二、三の公判廷でも糟谷君の問題を全面に押し立てて運動をやったことの中で、これは、例之は裁判闘争であれば一〇年も続くといいことがあるわけですが、一〇年続かれたらたまらんといいことで終結をしたという風に考えてい

助罪で、二四名が起訴され、裁判闘争をやっておいた訳ですが、その時でも、最終的には、一審で、全員です。ね、最高三年の執行猶予を、付けて判決が、下りました。その判決文で、こういう風に、言っております。

「本件、各犯行が、計画的で、その規模、態様、当時の客観的な状況から見ても、法規侵害の事象が、大であること及び、軽視し難い、結果を招けること等、考慮するとその刑責の重いことは、いうまでもない」

ま、この段階で、被告席が、一被告は直ちにそこで、実刑がかけられるか、一審で、予測していた訳ですけれども大変だということ、……、本来ならば、主文が読まれてですね、判決が実刑何年とかですね、執行猶予何年という風にいわれる訳ですけれども、この当時は、いわれずに、主文の後に「まわす」と言われて、判決が、おつ、と長く続いた。だから、この様に、最後まで、被告席は、騒然としてたがわついたので、

ます。その意味で、今11・13の被告がいろいろと、ちっちゃな町工場で施設をやっている者もおりますし、少し休憩をして学校の勉強をしている者もいます。そういう中で一人一人の中に、糟谷君追悼せよということをやっております。

### 糟谷君虐殺の警官を徹底的に追及し有罪の烙印を

実際僕は、糟谷君という青年を全然知らん訳です。ね。

僕は大阪でしたんです。ね。糟谷君は岡山でしたから全然知らん訳でしたけれども、まあ、僕の中で知っていることには、二二にアールを出されている内藤君ですね。当時、岡山大学におりましたんで彼を一番よく知っています。僕もまあ、あの告発を推進する会の被告としてやっております。岡大にも告発する会があったわけです。その時話を聞いたわけですが、まあ、高橋知也さん

いさつに代えます。

の『明日への幕列』という本がありましてここに色々書かれております。糟谷さんは例えは非常にですね。先程主催者の方からありましたけれども、ま、少し二ヒルなところがあるわけですが、権力に対する憎しみは毅然として強かったわけですね。ま、僕もまた、七年間の間、いっことで権力のおくらつさといっことも感じてましたし、とくに付審判の關いといっ意味では、これはですね、今まで戦後刑事訴訟法段階の中で、ほとんど目の目を見てこなかった、すなわち、被害者を救済する制度として戦後、付審判制度と檢察審査会制度というものがもうつけられたわけですね。この二つが、特に付審判制度が活用されこなかったといっなかでそれを活用した、しかも付審判關争にかかりつつ、こたわり続けるといっなかで、糟谷を虐殺した荒木・赤松・杉山を、實際裁判上では、それは何の罪も与えられておりません。しかしながら、我々は、彼らに、有罪であり、責任は彼らにあるといっ確信を強くもっています。以上報告して、あ



# 破邪顯正

受難者——戸村一作・糟谷孝幸を想う

前田俊彦 [三里塚労働台宿所代表]

## 日本の解放闘争史上で 倒れていった人々を想う

糟谷君が虐殺されてから十年たった。私はこの十年と、いっことの重みをいろいろ考えるわけですが、私は戦前からやっあって、大正事件それから慶應のときに大杉栄が虐殺されるというようなことがやはり、日本の解放闘争史上での、倒れていった人々のことが頭に浮かびます。私が実際に自分で運動なり闘争なりに参加をして最初に出食わしたのが、山本宣治が殺された、その葬儀に

参加して、それから以降、ま、ま、ま……小林多喜次が虐殺され、のぶはるな虐殺される。

私どもの多くの同志が倒れ虐殺されていった。そしてそれらの人々をのりこえてと闘うといっことが、そのつどいわれておりながら、今日なおやはり権力は、我々におおいかぶさり、我々は必ずしも、これらの闘いをのりこえてきたとは言えないといっことを、今ここにきて、糟谷君が虐殺されて十年たったといっことを考えるが、いっことをしきりに考えています。

實際私は、今私自身が出している、『松島亭通信』といっものの原稿を、その原稿のタイトルが、受難者と予言

者、というタイトルで、この原稿はこの白川君が読んだけども、あんまりおもしろくもなんともないというのです。それが、印刷所が二五日までできないというので、白川君からほめられなかったということもあって、いや気がさしているのです。

で、その受難者ということについて、ちよっとお話ししたい。やはり戸村さんが最近なくなられて、やはり戸村さんも、人民解放闘争においての受難者とわれわれは考えるわけですから、受難者という、これは宗教的な一つのことはとして、法難、受難というふうなことが、しはしはいわれているので、あれども、ある一つの教義それは日蓮がまあ彼は自分を法難者、法難というところ、ですけれども、彼が法華経の眞理というものを確信し、その確信のうえにたつて正義とは何んであるか、邪悪とは何であるか、ということを感じ、そして、**破邪顕正**つまり邪を正義によって打ち破るという闘い、そのことのために、一切を投げすてる、自分の生命をも投げすてるという闘

ら立候補させ、非常に多数の票を得て、当選させたことがある。

それは共産主義者として治安維持法の対象になる人として投獄されておる。つまり私有財産制度と天皇制の否定ということを旗色にして闘った人が投獄されておる。この人を獄中から立候補させて府会議員に当選させる。この集った票というものは、どういふものかといへば、私は天皇制に反対する、あるいは私有財産制度に反対する、ということよりも、彼が、つまりわれわれその当時の共産党が、受難者まではいかぬまでも、必死になつて、決死のいきおいで、いかなる犠牲も恐れず、正義のためには、いかなる犠牲も恐れぬという闘いを続けておった、その闘いぶりに私はそれだけの票が集ったのだと私は思

う。

日蓮に対する信仰があったということも、法華経の眞理というものを多くの民衆が理解して、そして日蓮に帰依して、いかにいふまで、日蓮が破邪顕正、当時の乱世にあっ

いをやって、時の権力によって彼は、佐渡に流されるわけですから、そしてさらにはひどい彼は死をむかえる。われわれはやはり日本の受難者、私の七〇年の歴史のなかで遭遇した多くの受難者という人々は、やはり自分の信ずるところ、その下に最も忠実にそして闘ってきた、利害関係ということではなくて、やはり正邪の判断によつて、自分の生きる道を全うしたということがあるわけです。私の方は戦前の共産党員で、私も戦前の共産党員というものは、私有財産制の否定、天皇制の否定、この二つの大きなスローガンを柱にして、そのためにはわれわれはいつでも闘う。この闘いのためにわれわれは死をもいとわぬ、そういう闘いを戦前の共産党はやってきたわけです。

で、われわれはその当時人民からの支持が……共産党に対するところの支持があったと……かなりあったことは、はたしかです。私はその当時大阪において、獄中において、人に有名な弁護士ですが、大阪の府会議員に獄中から、**邪をうち破り正義を顕していくと**、そういう闘いをすすめた、その闘いぶりに多くの民衆が帰依していった。

しかし、日蓮というものは、やがて合法宗教になると、こんどは、お題目、法華経なむみょうほうれんげきょうというお題目をとらえ、あるいは読経者、お経を読む、で、お経のありがたさ、お経を読んでおれば何なりつか、**極楽浄土**が到来するであろうというふうなのは、やはり共産党とかいうふうなものはかつて非法法るときは、やはり、りすべてを投げうって闘うということがあったけれども、いったん合法政党になると、共産党も共産主義者もお題目をとらえる。共産主義とは何であるかを理解し、共産主義万歳、万歳というておれば、そのうちに解放、極楽浄土が実現するであろう。一億人民が、みんな共産主義に万歳、万歳というふうになれば、それでわれわれの理想の社会が実現するであろう。そういう状態がある。これは共産党だけではなくて、今の新左翼にもそういう傾向がないとはいへない。

19

やはり、われわれは闘うということについては、何が正義であり、何が邪悪であるかということについては、我々自身が判断をもち、そして、その判断に従って我々は妥協のない闘いと、その闘いぶり、それを闘うことによつて我々の解放はありえない。

## 不正義の中の闘い、闘いの中の不正義

### いかに闘い、闘いながら

しかし、その前に、我々にとって何が正義であり、何が邪悪であるかということの基準、それは何にもとめられるか、我々は、共産主義の教義、あるいは社会主義の教義というふうなものを基準に、共産主義の教科書をテキストにし、マルクスの文庫をテキストにして、我々が正義のものさしとすべきではなくて、現実には人民が不正義のために難をこうむつておる。災難をこうむつておるその災難の中に、もっとも現実的な不正義が行われてお

る。その災難の現場において、その災難をどう思つておるかということが、我々にとっての正義のものさしでなければならぬ。

三里塚において、三里塚反対同盟農民が土地を奪われ、しかもその奪われ方たるや全く反対同盟農民を叩けら扱にする。この不正義、この不正義を我々は共産主義の教科書によつて解決するのでもなければ、マルクスの文庫の中からその闘いの原理を学んでくるのでもなく、この不正義の中に、一つ一つあくまでも闘つて三里塚の多くの……なまじい話があつたように、東山君であるとか、その他多くの犠牲者が出ております。しかし彼らの闘いというものは、受難者・受難者はほかにならぬ人である。そこにおこなわれておるところの不正義、邪悪によつて災難をこうむつておる人民、これは私は三里塚にかぎらない。水俣においても、あるいは労働者がマル、運動という形で、人権が無視されるというような形では、やはり全国のいたるところにおいて邪悪が行われて

おる。不正義が行われておつて、その不正義によつて人民が、かつてない災難をこうむつておる。この災難をわれわれの災難とする。で、その災難の中で、われわれがそれと闘う。その闘いの中から我々の将来の展望というものが出てくる。

マルクス主義の……資本主義がある科学的法則に従つて社会主義になるという科学的社会主義の教科書によつて将来を予言するということ、ふつておる。我々が自らの闘いの中でしか将来を展望するのことができない。予言者はつねに闘うものの中から出てくる。予言者というものは憂うる。憂うることによつて闘う。そこからしか我々も将来の展望というものは生まれてこないであ

らう。であろうではなくて、こゝに私は断言することができる。

私は戸村さんと親しくしておつたのですが、戸村さんという人は、あの人が生前のときには、生きておるときは、率直に……三里塚の反対同盟の中での重みといひますが、しかしに大きな存在であつたにちがひありませんが、彼がなくなつてみて、私が考えていたよりもはるかに、反対同盟にとつて大きな存在であつたといつて、と痛感している。ということ、あの人はクリスチャンであり、芸術家でもあつたし、一つのあるイデオロギイによつて三里塚闘争の将来のゆくすえを憂うる。あるいは闘うというのではなくて、やはり反対同盟の人々が

# 反軍日本原

発行／反軍・日本原編集委員会

代表世話人／宮本通正

連絡先／岡山眞勝田郡奈義町宮内5 内藤気付

振替口座名／反軍日本原編集委員会 岡山四八四五

一部

五〇円

こうむっている災難。この災難と闘つていつ闘いの中で彼の希望、彼の予言者の行動というものがあつた。

とりわけ戸村さんがパレスチナに行く以前と以後ではずいぶん変わった。パレスチナに戸村さんに行く前に、戸村さんがこう言ったことがあるんだ。「三里塚のようなところに空港をつくらなくとも羽田の空港を拡張したらいいんじゃないかと」。

私が、羽田とか横田だとか、そんなことをいれんほうがいいんじゃないか、という。戸村さんはやはりそう言わなければ無責任な反対闘争になりやせんかという。われわれが何んで責任を負わなければいけないのか、というたことがあるんです。

しかし戸村さんがパレスチナに行って、そしてその解放戦線の人とあつて、奪われイスラエルの地になつたという既成事実、この既成事実としてのイスラエルの存在これをあくまでも徹底的に否定するということ、もはや世界の歴史のうちに消すことができない存在となつてお

の彼自身の考え方の変化がある。

私自身も、これはきのうの考え方と今日の考え方ともちがう。きのうはあめいうことを言ったが、あれはすしおかしかったというふうなことをしよちゅう思う。そういうことを、我々は現実の闘いの中で、我々のいわは路線……で、つい二・三日前にも、ある党派の連中が私のところに来て、路線とこのことをしきりにいう。一体路線とは何なのか、その路線というものはどのような教科書から出てきた路線か、その党派の連中がいうには、あなたに戦術のことはかりいって、戦略のことをいわけいではないかという。そうではない。三里塚にとつて空港を廃港にするという戦略、これ以上の戦略がない。

るかのごとき、奪われた土地での主要な既成事実をわれわれは徹底的に否定する。なんらかの妥協の道をみい出すのではなくて、これを徹底的に否定する。イスラエルの土地からのけて、これをアメリカのカリフォルニアに持ってゆけとか、どこどこにも持ってゆけとか、いつことをパレスチナの人民は、いつてみるのではない。あくまでもこれを抹殺する。この既成事実を消してしまわなければならぬのだ。そのことを戸村さんはパレスチナで学び、そして帰つてきてわれわれは、既成事実としての三里塚空港を否定しなければならぬ。

いかに巨大に見えようとも、これはコンクリートの固まりである。このコンクリートの固まりを、根底的に破壊し、もとの沃野にかえす。これがわれわれの三里塚の課題である。このことは可能である。というふうな戸村さんの思想の変化、これはある一つのイデオロギーによつての思想の変化ではなくて、実際の闘いの中から、そういう思想的な面、反対同盟の闘いのありようについて

にあるのが、三里塚闘争を何らかの党派政治の道具とするならば、それはまた考えようがあるだろうが、三里塚の反対同盟農民にとつては、三里塚の空港を廃港にするどのように廃港にするかというところが、もし戦略ということをいうならば、これ以上の戦略はない。

現実には我々は三里塚空港をどのように攻めてゆくか、現実には我々でいる飛行機をどのように飛行が不可能な状態におくことなのか、そのためにはいろいろな戦術的な問題があるだろう。そのことにこだわって我々が闘つておれば、あなたもそれが戦術的な問題であるののごとく思つたろう。我々にとつての戦略は、三里塚空港を廃港にし、日本人民の全体の解放をなすこと。単純明快なこの

# 馬天嶺通信

年間講義料  
二〇〇〇円

発行—日本原はんせん馬天嶺

御講読は—岡山県勝田郡奈義町宮内林八九四一  
TEL 〇八六八三六〇五五八一

XXXXXXXXXX

あらゆる犠牲を顧みず困難な闘いを身を

もって闘い続けてきた日本原農民の反軍

反基地闘争の姿を伝える交流紙

戦略のために我々は闘う。必難をこうおっている。この人民の必難をわれわれ自身の必難として我々は闘う。そしてその闘いの中なら、我々は将来の展望を見い出すことができよう。

私は、七〇年の間に多くの受難者を見つづけてきて、そして糟谷君が虐殺されて一〇年、我々はこの一〇年の間に父にほどの進歩があるか、我々は何ほどのものを獲得したか。戸村くんがなぐらってまだわすかですけれど、このわずかの間でも戸村さんの死から学びたいことは、闘うということが何であるか、我々は知らねばならないと思います。



# 裸で生と死と必死があつたなかで貨幣の呪縛を打ち破る共同の知性を創り出そう

## 骨を洗うー死者の追悼は死者を遠くけず死者に近づけること

ちょうど、三年前の七周年の時に、福岡で糟谷孝幸君の追悼集会がありました。それに呼んでいただいこと、お話をすることができましたのですが、今年また一〇年目で福岡この大阪で、糟谷君のことをあらためて思い返す機会をあたえられたことを大変感謝しております。

今、前田俊彦さんが、戦前の同志の死について話されていた間、思っておりましたのですが、私自身が覚えていた間いの中で死んだ。印象深い友達は、一九五二年の

## 花崎 皋平

人民広場の「血のメリーデー」事件の犠牲者でありました。あの時に、私は全学連として一番先頭におりましたけれども、その先頭の隊列の中から、法政大学の学生の近藤宏士君という人が、警官の警棒でなぐられて飯沼橋の警察病院で亡くなりました。そのことを同じ場所に居た者として、闘いの中で犠牲者が出ることに想い出します。

私にとってそれと同時に、ちょうど太平洋戦争で私より一〜二オ上の人が、最前線の戦闘員として亡くなっていること、最後には自分もそうなるはずであるという運命というものが、敗戦というものによって自分にはふりかかってくるなかったことのもつ意味をよく思い返します。

戦後すぐの時期に、あの太平洋戦争で死んでいった人々の志というものをどの様にして追悼したらいいのかわりも考えたことがあります。私は終戦時にはまだ中学生で生じたからその思いはすぐさま隣国戦争やマルクス主義の問題につながっていきなりキリスト教の信仰という方向にすすんで行き、そこを迂回して、朝鮮戦争の時期にやっとマルクス主義や階級闘争の問題に出会うという経過がありました。そういうことを今、思い出しています。

死者を記憶する仕方にはいろんな形があると思うんですが、その一つの印象的な例を、今度の追悼集会について考えていた時に思い出しました。島尾敏雄という作家がおりますが、この島尾さんの奥さんに島尾ミホさんという方がおられます。この方は奄美諸島のうちの加計呂麻島の何百年も続いた巫女さんの家に生まれた方です。つまり神を祭る神女の家系に生まれたそのミホさんが、特攻隊長として、その島に来ていた島尾敏雄隊長と恋愛

して結ばれたわけなのです。そのミホさんの書かれた、『海辺の生と死』という、自分の小さい時の島での生活と印象を綴ったエッセイ集があります。その中に「洗骨——骨を洗う——」という短編があります。

その島の風俗・風習として、「トブモチの田」という「遊びの田」があって、その田には、親戚で順ぐりに三年に一回、十三年を経過した人たちの改葬をするならわしになってくるのです。墓を掘って「お骨様」の洗骨（に参りました）とお骨に挨拶をして、新しく編んだ竹籠に骨を拾いあつめて入れ、横の小川で女の人たちがそれを洗いきよめるのですが、小川の中に着の裾をからげつつかり、白いふくよかなふくろばぎをみせて骨を洗っていた若い娘さんが、「おばさんが生きていた頃私はまだ小さくてよくおばえていたけれど、ずいぶん昔の高人だったらしいのね」と言って、足の骨を自分の眸にあててくらべてみせたりする。それを見ていたミホさんは、子供ながらに、いまは骨になった人も、昔は人の骨

を洗ったんだろう。私も死んだら、こうして骨を洗ってさうらうのかと思つてつくづくくはつかしい気持ちになつた、そういう事が書かれてくるのです。そしてよく「世は次々と」という言葉はあるが、いかにも世は次々な感じであつて思はれてくるのです。

この田は、祝祭の田であつてみなが御馳走を持ちよつて、そこで踊りをおどつてくれます。後世の人たち、つまり、死んだ人たちも向つておどつてくるので、死んだ人たちもおどりくらした、負けるな骨口（なほくち）と歌つて、そして一日海岸でおどり、うたつて、その死者との対面の儀式をするという短編なんです。

この骨を洗つてという風習で私が非常にいいなと思つたのは骨という物を媒介にしてこころをこすぬ、死んだ人の骨にがかに触つて、洗つて、さうしてこころをこすぬ、その人のこころを癒かいていたり、追悼したります。

南の島の文化の中に、さういふこころがあつてこころをこす

を知つて、死者とあやこす、骨を媒介にして死者近づける、いきよめる、あるいは死者に近づくと精神のありとつて感銘したわけなのです。

て、まあ、これが、これからお話ししようとする（こころ）関連あるわけなのですが、今年はずいぶん70年代が終る年で80年代を迎えるわけですから、その変わり目（かわり目の前）には、私がかつてあらためてこころまでなく、非常に根本的に考えなければならぬ状況があり、その中で革命の唯一の思想である、理論である、といわれて来たマルクス主義が問になおされてくると思ひます。かつてマルクスの時代においてマルクス自身が予想しなかつたような、あるいは「トブモチ」で予想だにもしなかつたような新しい事態と問題がわれわれに問いかけて来ているという時代状況です。その状況を、価値の問題としてこころに焦点をあつてこころをこすお話ししてみたいと思ひます。



# 自然のなかにも歴史と人民の いとなみが蓄積されている

七〇年代をふりかえってみますと、七〇年代と言いま  
すと私もその一部分でありましたけれども、日本の場合  
には全面で住民の闘いがはげしく展開された時代であ  
った。全国住民闘争の高揚によって特徴づけられる時代で  
あったように思います。

もちろん、その中で一番先進にあり、一番根底的な形  
でその闘争がはらむ意味を全人民の前にひらいたのが三  
里塚闘争だったと思います。

どうして三里塚闘争が全国のさまざまな住民の闘  
いをつうじて、人民がマンニフェストした。つまり宣言し  
た価値は何であったのか考えてみますと、それは農民  
にだっては大地であり、漁民にだっては海であり、それ  
から都市住民にだっては大気であり、といつぞういう  
人間の生活をもっとも根源的に条件づけ絶対的に制約し

ているそういうものの価値の再確認をいつていいと思  
います。つまりわれわれが生きものとして、そういう大気  
とか海とか大地によって、ささえられていると同時にそ  
れによって制約されている。そしてその自分達の根拠を  
開拓という名の搾取や汚染からまもらなければならぬ。  
まもらなければ自分達の最近言われる言葉でいえば自己  
同一性——identity(アイデンティティ)と言われますが——が失わ  
れるということに気づいたわけです。すなわち自分とは  
何であるのかという問いを自分に投げかけたとき、自分  
とは大地や海や大気といったものにささえられてある存  
在だということを確認のしつたがそこから生まれて来たこ  
言っているのではないかと思ひます。で、そういう自分  
達の根拠、立脚点といいますが、そういうものとしての  
自然は、単に人間には空気がなければ呼吸できないもの  
としての空気、あるいはそれがなければ生きられない物  
質代謝の材料としての自然といっただけでなく、そういう  
意味だけでなく、そこに歴史と人民のいとなみが蓄積さ

れたものとして、つまり価値を各々だものとして確認す  
べきだということがあるため強調されてきた。

壊死する風景という三里塚の初期の青年行動隊の対談  
集を読むとよくあらわれまますけれども、そのなかにな  
なせ空港に反対するのりというときに、この土地には百  
姓の涙と汗と根みが込められている。それをコンクリー  
トのもとに埋もれさせてはなるものかという言ひがたび  
あったと思ひます。

それは、そこに蓄積されている人間のいとなみ、あ  
いは人民の歴史を、死者もそこに埋葬されているその  
いつ感性面での連続性を基礎において引きつづくというは

## 裁けるか、いの闘いを

「一九八〇・三里塚・獄窓・法廷から」

（定価）二四〇円・申し込みは各地区救済会

発行行 三里塚登山連合会 港反共同盟 救済会  
全国三里塚救済連絡会  
闘争阻止連絡会 藤吉田



場のマンニフェストであるように思ひます。で、その連続  
性、自分の個の生涯とつうのを越えた普遍性の根拠を  
求める。歴史というものを単に書かれた文字でではなくて  
それが刻まれた風景のうちに確認をする。  
それを自分が現にあることの根拠とする。ですから、  
そこで、時間の幅を一等に広がりまして、現在の共  
同性だけではなくて、過去、現在、未来を貫ぬいて、死  
者との共通さをつくめた。あるいは未来の子供たち、ある  
いは孫たちといつものまで一連のつながりの中におく共  
同性といつものと思ひ起される。そういう時間意識とい  
うか、歴史意識が生まれる。再獲得されてくる。そん

# 火 篝

三里塚の戦いと格闘を伝える  
交流紙！！

（発行）プロレタリア青年同盟  
三里塚現闘団  
〇四七六七（ア）二〇二四

つ、いわば、悠久の大地と人間のかかり、それを媒介するものとしての生産活動というものに立ちかえり、そのついでに安んじられたと思つてはなりません。

三番目に、そのついでにいつて目に見え、手にいれられるもの、手にいれ目に見えものだけ、それは、たんに個別でなく普遍的な内容をもった物——大地と海とが——が闘争の根拠になったとき、闘争が永続的なものになりうる可能性がつまみ、普遍といつてすぐ抽象的な概念とか、あるいは神とか、あるいは階級意識とか類的存在だとかいふことの普遍的な思つてしまつてしまふ方に対して、それは、別の特徴をもつものを普遍だと主張してゐるのだと思つてはなりません。自分たちの足もとにあって目に見えものなどだけを、それが万人の闘いの根拠になつていふことが預められてきたと思つてはなりません。環境の危機のなかで、自分とは何かを確認することがさういふ形で大衆的におこなわれてきた、そのことと結びつくと思つてはなりません。開発に反対するといふ反開発、反権

力のラジカルな闘いを通じて普遍性への自覚が、主体の自覚となつたものとして立ちあらわれてきていふことについて思つてはなりません。

たゞし、人民といふ言葉のそのイメージがすなわ、住民闘争をつつじて非常にあたつくようになったように思つてはなりません。人民といふことは前からいわれていましたけれども、三里塚闘争、全国の住民闘争を通じて、人民という言葉が非常に新鮮に語られるようになった。いま語られているような人民の意味というのが、さきほど、前田さんがいわれましたけれども、マルクス主義が昔からもつていたプロレタリアート、あるいは、被支配者、無産者といふこととつゞくされているのか、と問いかえて見たときに、必ずしも、それがさういふものでないといふことはない。それよりもさう豊かな内容を、人民といふ言葉があびてきているように思われたいわけでは

さういふ特徴が七〇年代の闘争のなかで積極的なものとしてあらざだされて来た。しかし、少し立場をかえて

それを批判する意見を述べてみる。さういふ反開発主義は、近代の立場から見れば伝統主義といふものじゃないかといわれます。

近代主義と伝統主義と分けまして、伝統主義といふのは、地縁・血縁的结合に訴えるものである。地縁・血縁的利益によつてはられる。そして、つまり昔から、続いているものはなんでもいいものだ、それは変へてはならない、それをあくまでも続けようといふ、さういふのが伝統主義だといわれるわけですね。経済史家の大塚久雄さんなどは、マックス・ウェーバーにならつて、さういふことと伝統主義を規定する。

もちろん闘いなしに、住民が開き置かれた地域共同体のなかに埋めこまれていく状況の中へは、伝統の連続性を許すことが人間の自由な発展を疎外するものとしてあらわれるという事態は、かつていふくともあつたわけですね。それから、さういふ盲目的伝統主義は、せ、二、カネの原理、利益社会の原理とに対して、必ずしも抵抗の拠

点になつてはなかつた。増収の地を争ひつつか、ふるさとを大事にしよつたかといふ形での伝統主義といふのは、それだけでは開発に敗れつづけてきたわけですね、けれど、も、も、もとは、さういふ伝統的価値に依拠して来たとしても、三里塚であるとか、それから各地の原発反対の闘争であるとかいふことは、さうにある飛躍がいつていふ。開発の名におもひもつても近代的な装置、設備、超近代といつてもよいさうしたものが侵入してきたとき、も、も、も、それに対して全面的に対決して格闘を始めるときに、その格闘、闘いですね、それとの闘いが主体の側に飛躍を強制する。その主体に世界的といふ、いい位、大きな課題を首かせ、主体をいづく。つまり、どういふ課題かといふと、伝統主義の否定としての近代主義を否定する。否定の否定として、あたらしい原理をうたひだすといふ課題です。

第三世界の近代化が今はかんに行なわれていて、第三世界では近代化と闘つ住民の闘い、人民の闘いがあるわ

けですけれども——あとでお話する。アジアをまわった時の話につながるわけですけれども——アジアの人々が必ずしも予を調和的に、あらかじめまいった必然として近代に勝つたことはいない。近代の貨幣のもつ教化力、資本を神とする貨幣物神教の侵入といいますが、そういう力に対して伝統社会に生きてきた人々は、免疫性がないといつてころがある。もういころがある。

世界的に社会主義圏でも、今や近代化が盛んになっている。利潤原理の再導入などが行なわれつつあって、いまだ貨幣原理にもとづく近代社会との闘争に前線で勝利が確実になったとは言えないと思つてます。まだつはせりあいをしている段階であり、貨幣物神教の教化力は依然として強力であると言つていいと思つてます。つい先日、カウ原産に対して百何十億という金が絨織爆撃的に注ぎこまれてそれはかつてない買収金額だと新聞に出ておりましたけれど、そういう海まじい札ビラ攻勢もつて攻勢でもって反対闘争を切りくずそうとするのがむ

この攻撃としておこっています。ですからそこを直向した格闘。三里塚なら三里塚を直向した格闘といつものは、いわば世界史の未来をそこそこいけるかどうかという種類の格闘になつてきているといつてもいいんじゃないか。そういうのも大げさはないんじゃないかというふうに思えてならないんです。

そのことを少しアジアとの関連を具体的に例証するようにならなくては述べてみたいと思つてますが、今年（七九年）の三月から三月月程、韓国・フィリピン・タイ・マレーシアの四ヶ国をアジアのそれぞれの国の人々といつて歩いてくることかできました。その旅行でも、とも印刷されたことを一つ一つ触れてみたいと思つてます。一つは、韓国の民主化闘争。もう一つはフィリピンの状況なんです。その二カ所です。その二カ所です。第三世界の積極的な側面の見聞です。話の筋としては、感動的な闘争があるにもかかわらず、貨幣の支配と近代原理というものの格闘において第三世界の勝利は自動的に保障は

なれていないんだ。第三世界人民の闘いはすすんでいるけれども、近代化への圧力と要求もつよ、近代化がころがり出すと、その麻薬に中毒しやすい状態にあるんだといつてこのことをめめわけたのですが、しかし、同時に近代化を突破できる可能性も、第三世界——今日の世界的矛盾をかかえてこまかっているものといつての——にこそゆたかにあるといいたいです。

### 韓国民衆のふところの深さと 息の長さを実感

韓国には、四・一九を（五）月にして、四月二日から二日まで滞在したわけ。そこで民主化闘争を聞いているキリスト者の人々に案内してもらい話しを聞かせてもらうことができました。

私たちが会って、話を聞いた人びとのうちの主だった人は、その後、全部つかまりました。八月九日にその主だった人の一人が逮捕され、この十二月に釈放になった

といつての新聞で見ました。あとの一人は、カーター訪韓時につかまりましたが比較的短い期間の逮捕です。だのではなにかと思つています。

韓国のプロテスタントの指導的な神学者から韓国の近代と現在の闘争史の簡潔な講義を受けたのですが、その人はつかまらなかつたと思つていました。二二（二）来の前東京でキリスト者の方に会った。その人もつかまらなかつたといつてました。で、そういうふうなこの半年間の激動の中で闘った最前線の人かすべてつかまるかといふようなことだったんです。彼らは実に悠然としていた。ユーモアもあり、まったく韓国の権力に対して、おびえおびえている様子になかつた。これが一番感動的であったことです。その一人がいうには「韓国には一人のキングがいるんだ。キングがなんでも決めるんだ。そのキングのやり方がどうなんです」と、ユーモアをもって、精神的・道徳的に、むしろ側をまったく圧倒していた。「ここをK.C.I.A.に招待されて、まる一日尋問されるんだ

けれど、それがなかなかおもしろいんですよ。」「という  
言い方で自分のつかまつた時の話しをしてくれる。それ  
からY日結核の闘争の背後の重要人物としてつかまつた  
人は、それまで二回つかまつて合計で一九ヶ月投獄され  
た三四オの牧師ですけれど、三回塚は二期工区の工事  
をやむならやめてみろという態度であるという話ですが  
田さんの口から出まじれば、それと似ています。が  
この人は、逮捕するつもりで居たことなどは、いっ  
つに悪くないというふうい言います。韓国で逮捕さ  
れるのをごわがって何が出来ますか。なにも出来ま  
せんよ。そういう言い方で笑いとほすというか、一歩に  
ふすというか、そういう態度で強圧について話をして  
くれました。

キリスト教学生組織のリーダーである三ハオの方は  
一九六〇年の学生決起の時の活動家であったように、だ  
まちを歩いてたとき、通訳の女性の友達に話したり会  
ったんですが、その人は学生時代にK.C.I.Aにつかまっ

## 民衆を組織する解放の旅へ

永登浦というソウルから三十分ほど離れたところで

地下鉄に乗って行くとそのまま地上に出てゆける大きな  
軽工業地帯を訪ねて、その地域に活動センターをもって  
いる都市産業教会の話話を聞かせてもらいました。ち  
よつとY日結核の闘争が始まったばかりの時、四月十  
八日に第一回の座り込みをしたといっていました。その  
時には二百人はかりの女子労働者が二階から機動隊によ  
って、けおとされて、一人が重傷を負って入院した。ち  
よつと始まったところだったんですが、クリスチャンが  
どのようにしてそういう戦闘的な――そういう戦闘的な  
ところのは、少しいわたいとわかりませんが――労働者  
の中に深く入り込んで労働者を組織しているのか。その  
組織のしかたを聞きますと、だいたい労働組合は御用組

で接問されて学園を追いだされ、あらためて神学校に入  
って勉強しているという人でした。ですからちよつと六  
〇年代後半世代の学生といった感じの人で、彼がいつに  
は韓国の学生運動はまだいぜんとして強力である。ここ  
きのリーダーも今年の四月一九はわれわれが自衛して決  
起しなかった。それは出来なかったからではなく方針と  
して今年四月一カを自衛したんだ、といっています。た  
あとで考えて見るとカーター訪韓の時に焦点を合わせる方  
針だったように思えます。そしてわれわれは、非常に長  
期的な展望をもって活動している。どういつ長期の展望  
かという、韓国の将来をになう人物を学生運動をつら  
じて形成するべく運動をしている。そういう考えだったん  
です。

そういう話を聞いて、今の民主化闘争を闘っている人  
々のふところの深さと言いますが、息の長さを実感する  
ことができました。

合で必然たる運動が出来ない場合が多い。そこで七人か  
十人位の小グループを縦かに同一工場にいくつもつくる。  
あるいは工場を越えて地域のいろいろな工場につくる。  
その代表者が月一回集って代表者会議をひらいて情勢  
や問題を討議する。それから、その全体のグループから  
お金を出し合って一人専従を出して、都市宣教会の労働  
問題に対する担当の専従にする。牧師は、全体に対して  
精神的なアドバイスとか、それから看護婦さんを一人お  
いて労働者の健康管理をするとか、そういう形でかわり  
りをもつ。そういうあり方をとっているわけです。

その七人から十人位の小グループが、ある程度の教に  
なった時に組合の選挙においてリーダーを出して、執行  
委員や組合長をとって、そして組合を戦闘化させるとい  
う方向をとっている。話しを聞いてみるとほとんど党の  
機能なんですね。細胞があり、細胞代表者会議があり、  
細胞から一人送り出された専従があり、そして、その理

論指導とか精神的にそれを励ます牧師が地区福音というスタイルです。そして、生産業における細胞と地域における生協運動、消費者組合運動とを合せもってほしい。永登浦<sup>マシヤノボ</sup>においては、われわれはニケタの労働者を組織した。全体で千人以上の規模のそういう運動体をつくっている。その後いろいろしらべてみて、韓国におけるキリスト教がどういふ変化をこげたのかといふこと、いわゆる今までのキリスト教といふのは、個人の魂の救済、個人の悩みを解決し、個人になぐさめを与える、そういうものであったわけですが、そういふはなれて——これは金多可などの統一の思想なんかもそうですが——集團としての人民大衆の現実の解放と魂の救済とを統一する、そういう立場を確立しているように思います。

T・K生という人が書いてきている「韓国からの通信」三冊を帰って来てから通読して、気をつけて読んで、その三冊を讀んでいる鍵としてこの言葉ですが、それは義です。義と良心という言葉ですね。キリスト教を義を

求める者の宗教として位置付けている。正義を求める者の宗教として位置付けている。正義を実現するものとしてのキリスト教、大義を追究するものとしての精神的立場といふことで位置付けているように思われます。ですからイエス・キリストをどういふふうにかといひますと、イエス・キリストは政治犯として処刑された。それが法廷の陳述したなかにあるんですけども、それからYH結核とその背後重要人物としてつかまった文吏<sup>ウツヤク</sup>といふ五〇教才の戦間的な牧師さんがおられます。この方の教会はカリリヤ教会という教会ですが、教会堂をもたない教会で、さすらいの教会と呼ばれています。スラム住民の現実の闘争と結びついた教会なので、公然と集会を開けない。開くと弾圧されるというところで、地下教会である。スラムの中で点々と場所を変えて集会をもつ。そういう長征する教会として、教会の活動をいこうと

金多可の獄中ノート中の詩の構想にあるチャンイルタムに説いて、金多可自身が人生に旅であるといっています。その旅というのは、チャンイルタムでは、まず不幸な民衆が農村から都会へ出て労働者になり、仕事をなくして失業し、そして、スラムに入り、スラムに入って泥棒し、そして牢獄に入れられる転落の旅がある。そして、その牢獄から、こころは解放の旅が始まります。脱獄し民衆に愛と革命を説き、革命軍を作つて首都に進軍する旅だといふことが、殺されて復活するといふ旅です。そのように、民衆の解放の理念を、キリスト教の思想のラチからなきまでしてきているのです。

### 第三世界民衆の中に—— 息づく愛と正義

フィリピンでも、こんどはカトリック・プロテスタント両方の人々ですが、やはり同じような宗教者そのものの愛が湧きました。具体的には、人民の武装闘争に

キリスト教の坊さんだ、直母、支援に入つてゆく。人民の武装闘争と結びつき、それに人々を牽引するという活動がみられました。それは、遠い南の島で行はれているんじゃない、マニラの市内にその支援組織が浸透してきているのです。それには非常にびっくりしました。町のど真中の、この会場ぐらゐの広さのキリスト教の会館の中で、今日は例会ですと、こ連れていかれたんですが、例会で何をやっているなどという、スライドを映して、サマール島という島の、苛酷な権力の弾圧と、それに対する人民の武装闘争をつたえる。そして、その印いで倒れた若い少将<sup>シロ</sup>の志の力。ハを求めるといふ集会だったんですね。

フィリピンのカトリックの労働運動がありまして、ヤング・クリスチャン・ワーカーズといひまして、YCWという略語で呼ばれています。この組織は、けつして左翼的ではない青年組織です。これは六〇年代の末、六〇ハと六九年ですね。同時代の全世界での革命的高場の影響

を受け、やっぱり組織の改革を必要として、それまで  
 は、キリスト教の伝道組織だったのですが、その六ハ  
 ー六九年の時期にその下なるつきあがりがあった、キリ  
 スト教の信仰は向かい、信者であらうとならうと開  
 係ない、ともなく、権力と叩いて人民の利益を守る労働  
 者青年はすべて加入してよい、そういう方向に方針を更  
 めた。それ以後、各地にオルグを派遣して、叩き地を  
 創っていつているわけです。七〇年代はなほなら各地に  
 保税加工区という輸出の為の、馬山の輸出自由地域のよ  
 うなものも出来始めているのですが、フィリピンのマリ  
 ベレスと言うところも、そのような保税加工地域で、そ  
 こには、若い労働者が農村から続々集ってくる。マリベ  
 スの輸出加工区は、二万五千人の青年労働者がいて、そ  
 の内の約八割は女性である。そういう場所が出来ると、  
 そこへマニラから工場労働者の経験のある女性オルグを  
 派遣する。一人ごり身、誰も知らないところへいくらな  
 ら金をもらっていくわけです。そこをまず行商をやっ

ていこうな人と知り合って活動家として見込みのありそ  
 うな若い女性を獲得する。その獲得された若い女性が、  
 こんど我々と一緒に歩いた二四才になる女性ですけれど  
 も、その家に住み込んで、そこから女子労働者の中に  
 活動家組織を創っていつて、今や専従三人、組織人員は  
 どのまごな正式の同盟員なのなほ、きりしません。中  
 核になる活動家を十数名もつ組織が確立されています。  
 討論の中で、あはれな巨な仲間の労働者を組織する原理  
 は何ですかという質問をいただきました、それに対する答  
 えは、愛と正義、であると答えてくれたんですね。愛と  
 正義と言われども、それではあまりに一般的だ、もうサ  
 ー何な面を言いたいということな正直に思ったんですね。そ  
 れで、キリスト教ではないといけないうのと、さっ  
 さみたいは答えが返ってくるし、愛と正義、をもう少し  
 具体的に説明してくれないかといつても、それはまあ我  
 々としては、愛と正義だといつ答えて終りなんです。  
 で、考えてみたんですが、正義だと愛と愛と愛といつのと、

日本のような社会の中で暮している我々が、困くと、いな  
 にもほんな、空文句のように響くのですが、マニベレス  
 に行つてみて、人々の生活にふれてみると、その中の  
 生活の言葉と切迫はない形でも愛と正義が確認できるよ  
 うな感じは必ずあるわけです。というのは、階級階級が、誰も  
 教えてくれなくても絵に書いていかに見えてくれる。更物  
 に見えるんです。どういつふうに見えるかというと、そ  
 こは海岸で、もともとは四、五千人の人口の漁港だった  
 んですが、港になる良い入江があつて、波が静かだ天然  
 の良港です。そこに、すぐ低い山がせまっています。その  
 小高い山の上には、このころのリゾート、ホテルのよう

なきれいなホテルがあるんですね。そこは、そこに立地  
 している多国籍企業、たとえばフォードの自動車工場の  
 経営者が泊るホテルです。中腹には、きれいな教会と映  
 画館があつて、ここは労働者も行ける教会堂です。その  
 すぐ下には、管理職はなんなのパートが並んでいる。  
 海岸沿いには、工場が並んでいる。工場は繊維、履物工  
 場がたいのですが、フォードの自動車工場や、日立のケ  
 ーブル、リコーの時計なども立地してました。日本の  
 企業が輸出しているものもあり、その工場がぐるっと建  
 ち並んでいるんです。そこがとにかく一角となつて、  
 その一角は、都庁着立入り禁止で、入る人は身分証明書

# 国際連帯季刊情報 世界から

定価七五〇円

(送料二六〇円)

No. 1 創刊号・第二世界の排戦(インディアン・インドシナ)

No. 2 アジア人民衆との連帯人

No. 3 フィリピンー人民闘争は広がり深まる

東京都千代田区神保町  
 1の30 正光ビル4F  
 振替(東京6-163403)

アジア太平洋  
 資料センター  
 03(291)5901

きつければばならない。私も、なまを思ふようにして、ミ々々々まぎれこんだんですが、すぐさま見つかつてしまいました。その区域のCIA、ゾーン情報部の私服に広場をなためられて、もう危いから早く出てくれと業内役の活動家と言われて、追ひ出される恰好で出てきたんです。そういう監視体制が敷かれてある。そして弾圧組織は、ゾーン・ポリスというガードマンばかり、その上は、いまだに軍隊で、何処迄行くと軍隊が出てくるという構造です。

弾圧のことは、もう少しあとに話しますが、そういうふうにして山の上から段々に厚利ができていく。そして、少し歩いた所に、労働者の住居がある。労働者の住居は、まったくのスラムです。マジマで最も貧困なのはフィリピンド、その貧困は、息を飲む思いでした。その極貧ぶりを底辺にして、海岸側から見ていると階級構造を高いに感じて目に見えるんです。そして、海岸のスラムでは、人々は、水を買わなければならないんです。リヤカ

ーの上にはドラム缶を積んで水を売りにくるのです。生活に欠くことのできない水も買わされる。そうすると、こちの奥に近代化は工場の方ではふんだんに水をスプリングラーでまいたりしている。そういうふうですから、搾取というのは観念じゃなく現実を目に見える。

それから、労働者の日給は二五〇円から三〇〇円くらいで、一日は時間労働は建前で、だいたい十二時間くらい働く。朝六時くらいから人々は、続々と歩いて出ていって夕方六時くらいに寂れた顔をして帰ってくる。そして住んでいる所は、おそろしく釜ヶ崎よりもっと思いだろうと思います。下はまったく土間で、まわりをぼろぼろの古ベニヤ板で囲った二坪半くらいの所に二段ベッドで四人とかが暮らしている。トイレは百人に二つ、浴室は百人に一つとかなです。浴室といっても水をトタンで囲ってある中をかぶる場所のことです。まあ、そういう暮らしで持ち物はほとんど何にもありません。歯ブラシと着せえ少しいふつです。そんな暮らしをしながら、農村から

出てきたらその労働者が動いている。フォードの工場で山猫ストがあった五〇〇人の労働者が一季に解雇された事件が三月五日にあって、その参加者から話を聞かせてもらいましたけれども、どうやって食っているんだということ、まあ、神さまのおかげで食べてますという答えはないです。そういう皆の身体を見るとき、御飯時に、家にいる人は誰でも平気で食べていいなともいわずにはみんなやっけて来て食べる。懐るのも土間にころもをすろりど布団なんなはいらないから、そういうところみんないっしょに泊っていったりする。それは一つの強いられた形ですけれども暮らしを共同化している。それななければ生きていけない必然として共同性がある。だから、そういう生活を根拠にして、愛といわれ、目に見える不正と搾取を指して正義といわれる時に、うんそうだと、みんなが身内に起ちあがるという事な御得でございました。



裸で生と死ともきあうなかで共同の力で近代文化を越える道を探ろう

で、そういう第三世界の人々の貧困を見て、考えついたことがありました。それは、人々において死ぬということが自らの死に等であることです。日本の場合、死ぬということとは、日常のものとして近々感じられなくなっていますけれども、この地では武装闘争ではもちろん死は身代である。フィリピンのCIAにあたる若手弾圧機構というのはどうですかと聞くと、フィリピンのCIAは、頭がなくって力ですという答えでした。それはどういふことかというところ、うるさい奴は消してしまおうということなんです。捕えて裁判したりするよりは消してしまおう。都市ではつなまえて牢に入れろことはあっても都部に行けば、行方不明にされちゃう。行方不明と

はみけ者それちやっぴたという事なんです。マリベレスのカトリックの神父に会いましたけれども、彼の反逆でバター・ラン半島でアジアその最初の原形建設に反対した神父がこの殉難者になってしまったという。ですから、そういう意味での死というものに、殉難に立ち上がった時には、いつ見舞われるかわからない。しかし、そういう場合じやなくても、乳幼児の死亡率はものすごく高いし、病氣には、これも患者は少ないし、金もないから死亡率は高い。もう四の五の死は子供を一人ほども生んでおぼあせんと、いう感じの老けた者になる。そういう者を見ていて生と死がいやでも感じさせられる。その人間の命のあやうさな遂に、人間のまるごととこという事ですね、私の感じはたでは、生きものとしてのまるごととこを感じさせ、実際なんにも持っていないという事もある、身一つという事になる。裸で生と死というものと向き合ひなければならぬということなら人間とはもともと生きものだったんだなあという感慨をなげさせられたわけです。

す。生きものとして、根拠的に平等であるんだなと、つくづく思えてしまいました。そういう感じと、七〇年代日本の住民闘争を通じての自覚、つまり眼に見える形で普通のものに自己を委ねた時にきりめよく殉難したてきたという事をもつ意味の自覚が、必ず身につけてくるように思いました。しかし、そういう生存に直接に根ざしてのたばかりが、第三世界にあるとはいえず、つきもいきましたようにされて万々オカという事、それはどこにい行かないだろうと思つてです。というのは、近代化の力の恐ろしさというのは、そのたかきを吸収して、なだめてしまつたたかきにあるからです。アジアのどこへ行つても消費文化というものに対する渴望が人々をころえていきます。消費文化が入ってきたときに、それに対する若者の飛びつき方をみると、それは活動家非活動家を問わずひっきりつてしまつてしまうところがあつた。トランジスタラジオとか、バイクとかに目の色をかえるのは、だれかれ区別なしであつて、カトリック青

年労働者の活動家だからさういうものには批判的かといふこと必ずしもさうではない。それで、さうした場合の消費文化に対する抵抗力が弱い。さういうものがない。抵抗力がないから、もしも、権力、資本の側が、日本で高度成長でこつたような巨額というような戦術をとつておかつて来た場合には、闘争の切り崩しされる度合もかなり速いのではないか。そんなことを考えると、やっぱり近代というのは容易な話ではない、手ごわいものとしてわれわれの前にあるんじゃないかと思つてきました。そして近代を超えることになったときに、やはり帝国主義本国人であるわれわれと、彼等の間で、人民相互の文化の交流、あるいは、むしろ相互のゆすりあひを起して、それを媒介にして、近代文化を超える道を双方から近づくのではないかぎり、一方的にアジア、第三世界の、から超えることには、やっぱり思ひました。



貨幣の呪縛を打ち破る共  
同の知性を創り出そう

最後になりますが、いま中国でも、社会主義があらたな近代化志向に見舞われ、その挑戦の前にたたきかれています。二二八来る前に東京で菊池寛さんとから中国へ行つて来た話も聞きました。それを聞いても更に昨日のことは夢のようという感じでした。まとめて個条書風にいうと、中国は三つの世界論はいずれ放棄するであろう。それから社会帝国主義論は変更し、ソ連社会主義規定が復活するであろう。人民公社もやがて解体するであろう。産地制限の強化というものも非常に抑圧的な形で行なわれていて、子供を一人しかほまないと宣言すれば、自留地が増えるというふうなおたたちで、利益誘導によつてそれがやらせようとしている。さういふふうな話がある、マルクス主義の革命の理念は、革命後社会の建設



という点では、ほとんどことごとく言ってよいほど挫折させられている。國家を越えるというところにおいてもそのまじしよえ、革命後國家の中に現にだすことはできない。それから人権と自由の理念が躍動する。うな社会建設の方向へ向っているのかといえは、それを見ることかできない。近代の生産力、技術文明を人間がコントロールして、環境問題を引きおこさないような方向に社会建設が進められているかといえは、これまた、そういう徴候はなかなか見つけにくい。といった状況の中でありためて、マルクス主義を問いかえさせるわけです。そういう中で、第三世界では、宗教に基ずく革命闘争、基ずくといつてよいのかどうかわかりませんが、基ずくのではないかと思つたんです。宗教が自己変革を遂げるような形で革命闘争と結びつく動きがイランを始めとして現れられてきている。そこでわれわれとしては、どういふふうに考えるべきか、じゃ伝統宗教が近代化を乗り超えていけるのかといえは、歴史的には、近代の信條を神とする

信仰に伝統宗教の信仰は勝つてこなかったといつていいと思つたんです。近代が成立する過程を思ひかへれば、だとすれば、われわれは、世界宗教といつもの張り合つてそれに劣る世俗的な革命思想をつくりあげなければならぬ。二の兩者の間で次の社会を、未來の社会をどう創るのかといふことのハゲモニーの主導権を握る争いがいま世界的にはじまつていっているように感じられるわけです。マルクス主義を神といふ様な主張が現われ始めてきています。マルクス主義はある相対化、自分のもつている固定化を大胆にとりはずつてゆかばうって、組合營えて、そしてあたらしい次元へ進出しなければならぬといふところに来ていると思つたんですが、それは決して共産主義の理念から遠ざかるといふのではなくて、共産主義の理念をとらえかえして行くプロセスとして、そういうものを位置づけたいと思つたんです。共産主義といふのは、われわれ類的な共同存在の意識といふものであり、人類の歴史の極限としての世界共産主義といふものに向つて、それい

や、どういふふうに戦いの、役にたたなくなつた、あるいは状況にたち遅れた理論を相対化していくべきかといふふうな問題をたて、その中で近代の信條の偶像性を破壊して行く、あるいは信條の誘惑、それがかつて支配力、呪縛といふものを打ち破つていく、新たな共同の粘性であるとか正義であるとか合理性であるとかといふものを創り出さざるをえないところに110年代はいやおうなく立たされていふんじゃないかと思つたんです。そういう問題の前で、われわれにも、これまでどの年代をくぐつて

また人民の経験、三里塚を先頭とする住民の闘い、あるいは職場における闘いの経験があるわけだ、それらで一つの素材にして、敏感に感じています。秘密にこころにすか、分析し、そこからあらたな方向をさぐりあげ新たな主体形成へ向つて行くべきではないかと思つたんです。そういうことが開つて来た人を記憶し、われわれのたまたかしの不十分さをそこで反省し、決意をあらたにするといふ、そういう位置の中身になるんじゃないかと思つたんです。

全国の闘う労働者・人民を結ぶ

# 労働情報

日韓問題特別号 好評発売中!!

(発行日) 毎月1日、15日  
 (定価) 150円 年向 4,200円 半年 2,100円  
 (申し込み) もよりの支局、以下  
 東京都港区新橋5-13-12  
 03(433)0375

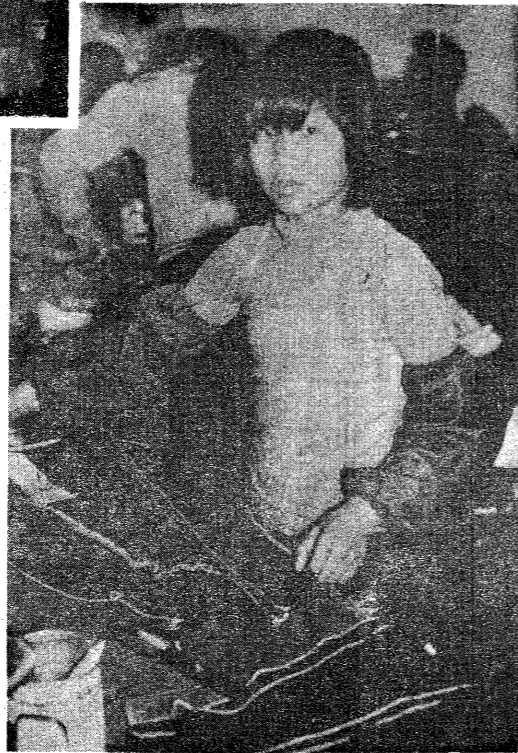
発行 『労働情報』 編集委員会



民衆蜂起直後の韓国  
 (10・27ソウル)



争い起ち上った韓国女子労働者



週六〇時間労働 月六〇ドルな  
 大半の韓国女子労働者



新民党党舎に籠城  
 したYH貿易労働者

三里塚・婦人行動隊一闘いの魂はおとろえず  
(8・26 横塚要塞戦)

全国全共闘連合  
結成大入会(8・5)



人民の解放と革命主体形成の指導的核

新しい革命党の建設を闘いとる

白川真澄 「共産主義労働者  
党全国協議会」

生命をかけて闘う。そこから犠牲者が出る。そして、  
そういう戦死した人達というものを、私たちが、自分達  
のなかから失わぬように大切なものとして維持して  
ゆく。そういう革命というものに、かかってくる重みだ  
と思います。

もう一つ、重みの中身じゃないかと思うのは、やはり  
糟谷君がその旗のもとに闘って死んだ翌のその重みが、  
私たち—私にはかかってくるように思います。

ベトナム革命に連帯して六〇年代の後半に日本で六九  
年の闘いを先頭にしてくる人々が闘い抜いたわけです。その  
六〇年代後半の闘いというものを一諸に闘い抜いた人々

三里塚は人民の解放と  
革命の基準をいし示す

糟谷君を追悼する集会というのは、他の様々な集会に  
参加するのは違つて、他の集会では感じられない重み  
と言いますか—そういうものを感じます。

糟谷君を追悼する集会で感ずる重みというものがどつ  
うものか、と言いますと、それは、やはり歴史というも  
のの重みだといえます。



190年代の私達の党としての、特に三里塚の闘いを通じての、新しい人民の主体形成の確信にたいしては、いかに建設的であるか、そのための基準、そのための力、そのための要素を、このように語るのか、とこの三里塚は集約されてこのようにいかに思いをめぐらせます。

そして、私たちが、この三里塚の闘いを通じて、当然、190年代後半に、これは新左翼運動という型で形成された。そして、それは、世界的・人民的根拠を持つべきですが、それらのものも部分的なあり様・役割・限界というものを越えてゆく——三里塚がそういう場にならなければならないが——新しい党の在り様というものを我々は創造していかねなければならぬという風に考えていきます。



まず、あるいは、自分たちにかけるべき盾であるか困難というものを、人民自身が自分たちの力で解決する能力をもっている、そういう力を、例えば私達は、今年の夏に明らかになった、いわゆる政府の側の話し合い路線というものに——非常に長い三里塚闘争の歴史の中でも未曾有の危機ですが——直面した反対同盟・農民が青年行動隊を先頭に、その困難を自分自身の力でこのように解決してゆくという力、それが求められてきました。

今年の秋の闘いは、まさに、そういう自分自身の力か、あるいは困難をかき盾を自分の力で解決し、それを解決する形を発見してゆくというに、人民として三里塚はたまたまありました。

そして、又、この私たちのめざすべきものは、この党というものが、新田さんと言われたように人民の闘いの外側にあらわれてくる革命の真理であるか、あるいは解放の大義とか言うものがあって、それを誰かがつかんでおいて、それをいわば教育を通じて人民に教える。

## 「党と人民がお互いに独立した、主体としてのむきあひ」が肝心

我々が、そのむきあひは、必ず、努力を通じての形をいふことには、いかなければならぬ。この革命党というものは、そのまことの「党」という風に言われたい来たもの、という風に置くのか、という問題ですが、その入るを簡単に提起をしておきたいと思えます。

やはり、党と人民というものが、お互に独立した主体として、むきあひつくりながら、肝心のむきあひをします。私たちが三里塚から学んだものは、人民から学ぶという、やや抽象的に表現できませんが——ことごとく思えます。言いかえますと、私たちが、本心に学びたいが、その人民、そのに生きること、そういう確信を我々は、三里塚の中で何よりもつかまえていくべきだと思

あるいは、まともなつかまれている真理の水準へ人民を引き上げてゆくというものは、おどろかすほどであつた。そして、いかに、革命の真理であるか、解放の大義とかいうものは、やはり、党的なもの、人民との非難に緊張に落ちた方があり、ぶつかりあひの中、始めて具体的に生まれてくるものだ。そういう観点、役割をはたせる覚悟をつくっていかねばいけないというふうな思ひがあります。いま話しましたことは、たゞ、三里塚闘争が生まれた事で明らかにしてきている解放の大義、人民の大義というものは、どこかの教科書に書かれてあったもの、あるいは、どこか三里塚闘争の外側にどういった真理が存在したと、このものでは、いかに、やはり三里塚に全力をかたむけた党派の独自の政治的主張、路線、あるいは闘い方という、そういう契機と、それから農民自身が自らの体で表現し、生活の中から表現して来た農民独自の思想、考え、道理というものが、結ぶつく中から今日、多くの人々をゆさぶる力が、革命の大義、解放

の真理というものが主升だされてきたといふふうには  
ちほ三里塚闘争を維持する必要があるとは思はないかと思  
います。そういう意味では、やはり人民といふものが持  
っている様々の矛盾、あるときは非常に能動的にあらわ  
れるけれども、一方、あるときは非常に受動的な姿であ  
らわれる。そういうふうな人民の内部的な矛盾といふもの  
が、やはり人民自身のカによって顕在化していかねば  
ならない。動かさなければならぬ。そのことを通じて  
人民が、自分が解決しなければならぬ矛盾を自覚して  
新しい解決の形態を創造してゆくということがあると思  
います。大事なことは、その過程は決して自動的に進  
行しない。そういう人民が自分自身の内部矛盾を自覚す  
る。それを動かして解決する新しい形態を築いてゆく  
テンになる役割をはたすといふものが必ずあるといふこと  
とどううと思ひます。

私たちは、そういうものがやはり、本當の意味で人民  
の主体形成の核心たりうるだ、ううと思ひわけでありま  
すけれども、その過程の中には、そいぞいが独立した  
独自の個性ある主体として向きあひながら、その党と人  
民という二つの主体の向き合ひの中で新しい革命の主体が  
形成されてゆく、人民の創造力が發揮されてゆく、こ  
ういふ受のあり様といふものを我々は、まだ十分な意味  
であるけれども確實につかみだしてつづつあるのではないが  
と考へるわけです。

## 人民解放の指導的核 心としての党の建設

二の経験は、わたしたちだけにとっての経験ではなく  
て、もじどおり日本の人民全体の解放と革命をやりとげ  
るといふことを考へ、かつ、そのために様々の道におい  
て努力をしている人々、そういう人々も共通の課題とし

す。私たちは、そういう事例を今年の話し合ひ路線に直  
面した三里塚闘争の中において見ることにせよ。たと  
えば、反対問題の中にもやはり既成事実を屈服してゆく  
という傾向と、既成事実をはわかして闘わなければなら  
ないという側面との非常に大きな矛盾が反対問題の中  
にうまいていた。闘う人々の中にあつた。そこで我々は  
たとへば、あの巨大な空港という既成事実をどうすれば  
突き詰ることが出来るんだという独自の闘いを敢然と組  
織せよしました。それは、九月七日に空港に突入した青年  
先鋒隊の闘いがそれであろうと思ひます。そういう闘い  
といふものによつて我々は人民が、自分たちがわかか  
る、自分たちが解決しなければならぬ矛盾といふもの  
が非常にはっきりした姿で浮かあがってくる。そして、  
そのことを通じてそれとは逆に、あの九月十六日の集會  
の會言に思ひられるように、自分たちの体内から既成事  
実をくつがせなさいといふ道念を道いぬえな限り闘いの  
勝利はありえないといふ人民的解決のあり方が中心と

て我々は新しい党形成のありよう、党を形成する課題を  
真正面から提起して、そして、そのためには、我々は様  
々な試行錯誤をくりかえすかも知れないけれど、やは  
り、その課題に向かつてきつちり立つてそこから出てく  
るあらゆる困難といふものを我々が引き受けてゆく、全  
体で引き受けてゆくという立場になつて問題を解決して  
ゆくという一つの主体として八〇年代にせむ踏みこんで  
いまたいと思ひます。そして、そういう意見を糖  
谷同志といふものを共通の絆にして二二に結集された皆  
さんが、その絆といふものを三里塚の中で、その絆とい  
ふものが新しい形にかわつてきた。二の三里塚の中で生  
まれてきた、新しい人民の解放を一つにつなぐ絆とい  
うものをもう一つ人民の解放の主体としての形成を指導的  
な核として役割をはたす真思想の建設と二の事業に  
向つて二二に共に進めてゆくといふ立場において、わた  
が今後奮闘してゆきたいと思ひます。そういう提起  
をもつて道徳の言葉にかえたいと思ひます。

# 糟谷孝幸同志が投げかけたもの

昭和二十一年青年同盟二里塚現闘団

## 糟谷日記の意味するもの

言を残して死んでいった人であるという事だけだったわけだ。

その時にぼくが思ったのは、何て言っても一人なんだろうと。こういう人がやっぱり階級闘争をやめるのかと。その頃は思っていたわけです。

それで糟谷君の事と自体というのは、ぼくはあまり深く考えることなくこの数年間を通じて来たわけですが、いとも、今再び、ぼくらが三里塚決戦、三里塚の闘いをやってきた中で糟谷君の事をどうとらえるのかは問われてくるだろうと思えます。

それは、79年という70年代の終りになって60年代の最後を飾った、あの秋期政治決戦を思いぬいた、そして

糟谷君の事について、ぼくの思っていることを簡単に述べていきたいと思っています。

実は、ぼくが糟谷君という人を知ったのは今から約4年まえて5年ですわ。その時に糟谷君がいったという人であるのかという事に関しては非常に簡単に言いかその時は知らなかったわけです。どういう人かと言えば69年の秋期政治決戦、佐藤訪米阻止で戦死した人であると、そして獄中で権力に対して黙谷しますという一

誰かがあるという事はないか

10、21の大阪は静かな葬式行列ではなかったのか  
参加したものは

秘かに期待を寄せていたものの全ことを一表切った  
消えない方がおかしいのではないか

僕はー政治的人間になるーことはできなかった  
僕を含めて、消えた人々を

その苦悩から救ってやるには、せむ、二、三に  
何か佐藤訪米阻止に向けての起爆剤が必要なのに  
犠牲になれというのか、犠牲にはなれないだ

それが僕が人間として生きることが可能な唯一の  
道なのだ

抑圧する者ー全にー災いあれ

69.11.8

二つ三つ言葉の二つは後日、13の闘いに先起したわけではないか、二つ言葉の中にぼくは再読して二つ三つの主要な問題を糟谷君はぼくたちに投げつけて

死をかけて闘いぬいた糟谷君が投げ出した課題は何なのか？問にかけているものは、たに何なのか？そのこと、我々、60年代への闘争をなげこい、からと、この確認しておかなくてはならないと思っただけです。

今、今日も来る問に、よく考えてきたわけなのですが、糟谷君の投げ出した問題は、糟谷君が死の直前に、この二つも闘争の直前に、すくなくとも、残した言葉の中、すくなくとも、語られているのではないかと、思っただけです。

すくなくとも、思っています。  
状況の中で苦悩する面では思いつめる時、確かならぬものは、  
自己保身にのみすがりついで  
閉塞状態におちいっている

我々に、この二つは、僕に、この二つ、  
未来、とは何であるのか  
我々に、この二つ、未来、は我々の後に、続いてく出る









うと思つたのです。既成事実としてある空港を権力は絶対に手離すはずがありません。我々は権力の既成事実を粉砕するためには実力闘争をしか成し得ないと思つています。単にそれが手段としてではなく、人民が権力と真向から反対する原理と闘いで自らの生き方を徹しようとする時、妥協が生ずるはずがないからであります。魔港をめぐす闘いは必ずやあの三・二六をはるかに上回る闘いとして広範な人民によって担われ実力闘争として斗い抜かなければならないと思つています。

三・二六を闘い抜いた被告の中で次のように言った人がいます。「血を流したり、逮捕されたりするぐらいでは、あの三・二六の勝利の感激を味わうことが出来るならば、我々はもっと血を流してもっと逮捕され様ではないか」やはり、我々も、そういう覚悟で闘い抜こう。

僕たちは、そういう覚悟と決意で、今こそ呼び起す必要があります。あのピストル乱射をもっとせぬ人

民の姿に、魔港決戦の主体と、人民を思ひます。

三年前の福岡の糟谷君の集會に僕は來しましたが、その時、花崎さんの講演があつて死をかけた闘うものばかりです。闘うものはないと。そこに本当の人民の主体としての人民がある。そこに解放されるべき人間の姿があると思ひます。当然死なない方がよいのですが、たとえ何人死んでも三軍家闘争は絶対に勝利させなければならぬ。それから、本日に日本に革命をおこすためには朝鮮人民と連帯して、マイノ民族と連帯して、そして、全世界の闘う人々と連帯して闘うためには、我々はそれを決して忘れるべきではないと思ひます。



# アツポール

## 三軍家闘争青年同盟

結集された仲間のみなさんへ、プロレタリア青年同盟から一言、述べたいと思ひます。

69年11月3日に、糟谷君が機動隊によって虐殺された訳ですけれど、それから10年経ちます。私たちがプロレタリア青年同盟は、73年に同盟を結成し、それ以降、日韓連帯闘争、狭山闘争、それから、今一番集中して闘つてゐる三軍家闘争を闘い抜く中で、たくさん仲間がプロレタリア青年同盟の旗の下に結集して闘つてゐます。その中には、私もそういふことをすけれども、69年の闘いを知らぬ者がたくさんいます。

その中で私は、69年を闘い抜いた活動家に話を聞いた訳ですけれど、69年当時の活動には、重さがあつた。三軍家では、シウカアデモの後、森や林の中を通り抜け、

帰り道は、凱旋行進のようなものです。本当にすがすがしい解放感がある。同じ千七も、69年当時、プロレタリアの谷間で、七七をいこいて、七七の谷間を帰って行くその道すから、そういう解放感はなかつた。という二七を聞いたことがありません。

二七のような69年の闘争の中で、重いか、を切り拓く歴史を切り拓く人民の花婿として、実力決起し、自らのもつすべきをかけた糟谷という人、私は深い共感を覚えます。10年を経た今、再び人民の大きなうねりが三軍家で、国家権力と対決してゐると私は思ひます。

71年の10月、鉄塔破壊道路建設の粉砕の闘いを皮切りに、三軍家闘争の「四葉の旗」の大義の旗の下、数多くの闘う人々が結集し、創意工夫をこらした闘いを続けて

きました。そういう闘いのつみ重ねの中で、28年の3月26日には、「三月闘争」を阻止し、空港を包囲、突入、占拠しよう、という相言葉の下に、この人が結集し、国家権力に対する人民の軍隊によって、開港を本当に阻止したと思えます。人民が歴史を切り拓くのだというところを本当に全国の人々に示したのだらうと思えます。

69年の糟谷君が闘った、そういう糟谷君が照らしたものは、生命をのけて闘った者こそが、そういう人民こそが歴史を切り拓くことができるのだというところではないでしょうか。

私たちは、3・26の中で、彼がつかう出さうとしたものを指問した様は気がします。しかし、この闘いをより発展し、それを闘い抜くためには、私たちは、更にそういう糟谷君、さらに三里塚闘争の中で、生命をかけた闘った東山君、新山君が示した勝利への道を身をもって実践し、闘い、発展させていかなければならぬと思えます。

1988年のことならば決して座っていて、座して切りまくることはできない訳ですけれど、私たちは糟谷君の闘いを本当に引きつぎ、我が身を賭けて闘い抜くことになってこそ、歴史を切り拓くことができるというところを握り、私の挨拶にかえたいと思えます。



## 事実経過

一九六九年十一月十三日午後四時から大阪市北区扇町公園に於て開催された「佐藤訪米阻止安保粉砕沖繩闘争勝利集会」は、反戦労働者、学生、ベ平連等の集会および総評系労働者の集会が併行して開催され、約四万人が集った。

大阪府警は、当日、会場周辺その他に約七千人の機動隊員を配置し、会場となった公園の各入口で検問を行ない、入場者に対しては強制的に不法所持品検査を行なった。

六時頃から総評系労働者がデモ行進に出発し、それに続いて六時三十分頃、学生集団が隊伍を組んでデモ行進に進発しようとして公園南西隅の出口から出ようとしたとき、待機していた機動隊が大柄をもって路上に並びデモ隊を両側から狭く押し包んで規制にかかった。そのとき「約三十名の学生集団」（毎日新聞十一月十五日朝刊）が火炎瓶を投げ鉄棒を持って機動隊の隊列に突入した。機動隊は直ちに増員して学生集団に

反撃、「全員逮捕せよ」との命令の下に、「殺せ！殺せ！」と絶叫しながら警棒と楯をふりかざして襲いかかり、撲る蹴る突き倒すの混乱状態を現出した。

糟谷君はこの時機動隊に突入した「約三十名」の学生集団の中にいたことは確かなようである。その時の状況は極度の混乱状態であったので、個々の状況を目撃確認することは警察側においても、また学生集団側においても極めて困難であった。

しかしこのとき機動隊に突入した学生集団は機動隊の反撃にあつてたちまち分断され、その場で逮捕され制圧されてしまっている。機動隊はさらにその後に行った学生集団にも同時に襲いかかっており、この時およそ五分程の間に約四十名が逮捕されている。

機動隊員が警棒をぬき逮捕に当たったことは府警警備部長も認めているところであるが、その際逮捕された者の大部分が警棒で頭部を殴打されており、また逮捕は免れたが機動隊員の暴行によって負傷し手当を受けた約六十名の者の大部分が、警棒によって頭部を殴打されている。

逮捕された者は逮捕の時から警察権力の手中に入ったわけで、糟谷君の場合も翌十四日午後九時に死亡し、さらに、司法解剖に付された後、家族に遺体が引渡されるまでもっぱら警察の管理下に置かれていた。

したがって、私たちは制約された状況の下で糟谷君に関する事実関係を把握したのであるが、その制約下において、なお隠されていることこそ告発において、国民すべての前に明らかにされなければならないものである。

逮捕者は現場から約五〇〇メートル離れた曾根崎署まで連行されたのであるが、護送車でピストン輸送してもなお足りず、一部の者を徒歩で連行している。

糟谷君は逮捕の際、頭部その他に瀕死の重傷を負ったにもかかわらず、この徒歩連行組に入れられている。七時過ぎ曾根崎署において写真および弁解録取書をとっているが、糟谷君は黙答権を行使し、まもなく曾根崎署内道場において気分が悪いことを訴えて倒れた。彼は廊下に足を敷いて殺かされたが、しばらくして、容態の悪化に驚いた警察は、救急車で北区浮田町の行岡病

院に運んだ。

病院に着いたのが午後八時四十七分、そして八時五十分には亀井医師が診察している。この時はまだ意識があつたようである。その後次第に意識が混濁していったが、病院は処置らしい処置をせずに放置している。十四日午前〇時頃意識がなくなったので、亀井正幸医師は硬膜外血腫と判断し簡単なレントゲン撮影をした。

同時刻頃、関西救急連絡センターに「逮捕者一名が重傷で行岡病院に入院している」旨の情報が入り、私たちは直ちに弁護士と医師とを病院に送る手配をした。午前一時頃同病院の整形外科医松木康医師が呼び出され、診察をしている。

私たちが派遣した榊嶋正法弁護士、葛岡享医師が行岡病院に行ったのは午前一時四十分である。しかし、玄関に待たされて来た看護婦は「警察から預っているのだから」といって強く阻止し、内に入れてくれない。約四十分の押問答の末、松木医師に会った。

松木医師は「レントゲンの頭部撮影では左側頭部の頭骨亀裂骨折で陥没骨折では

ない。脳の障害については硬膜外出血か、脳内出血か、脳挫傷があるのか今のところ不明である」と答えた。「脳血管撮影はやったのか」との葛岡医師の質問には「今からそれをやるために麻酔をかけてある。もし硬膜外出血があれば開頭手術を行なう」とのことであった。

行岡病院には脳外科の設備がなく松木医師は整形外科医であることを知った榊嶋弁護士と葛岡医師は、脳外科医を呼んで手術を行なうことを要請、当方で脳外科医を用意しても良い旨を申入れたが、松木医師は拒絶した。

二時二十分、榊嶋弁護士と葛岡医師は、麻酔をかけられ、意識不明のまま、ベットに横たえられている榊嶋君をはじめに見ることができた。榊嶋弁護士、葛岡医師はいったん関西救急連絡センターに帰り、京都大学病院脳神経外科の佐藤耕造医師に連絡をとり到着を待った。

午前四時頃から病院においては、松木、亀井両医師によって榊嶋君の開頭手術がはじまっている。

五時二十分頃、関西救急連絡センターか

ら日赤の医師を介して佐藤医師を派遣することを行岡病院に電話連絡したところ「五分前に手術は終わった」との返事であった。ところが手術は六時三十分までかかっていたのである。

六時三十分過ぎに榊嶋弁護士と佐藤医師が大阪府警の了解を得て行岡病院に行き、松木医師に手術結果をきくべく面会を求めたところ、前にも強力で阻止しようとした看護婦が、「松木医師は殺してしまった」と言つて玄関から内に入れようとしな。二時間余におよぶ再三の抗議に対して、やつと他の事務員と手術に立ち合ったと称する看護婦が、きわめてあまいに「硬膜外出血、左側頭部亀裂、左の瞳孔が開いている。意識がもどっていない。頭骨骨折のおそれあり、カルテはありません」とだけ口頭で答えた。

松木医師に面会し、さらにくわしい状況を知るべく、九時まで抗議し続けたが、それ以上の答を得ることはついにできなかった。

警察からおくられてきた被逮捕者であるというだけの理由で、弁護士および専門医

をもまったく隔離した状態で秘密裡に一方的な処置を行なつた行岡病院、ならびに担当医の患者に対する人権無視もまた糾弾されなければならない。

警察および病院は十四日午後に至つてそれまでの面接禁止の方針を変え、面会を許可してきた。それは榊嶋君の回復の見込みがなく、身元割り出しの必要があつたからと思われる。それから後は無制限に面会を許可し警察は身元割出しに躍起となった。

榊嶋君の容態は漸次呼吸困難となり、午後三時五十分呼吸がとまり、人工呼吸を続けたが五時頃から血圧が低下し、脈拍も弱まっていった。

午後七時頃になってセンターに身元がわかったが、もうすでに瞳孔は散大し危篤状態にあり午後九時ついに死亡した。警察はそのすこし前に氏名を発表した。

松木医師の記者会見の所見によると「けがの位置は左側頭部で幅二センチ、長さ五センチの傷が平行して二本見られ、はれてきた。傷の下は二カ所所四、五センチにわたり折れており、傷から見て鋭利なものではなく棒状の鈍器でなぐられたと思

う」ということで、「手術では血腫を取除いたが、頭に打撃が加えられているため、脳がふくれ上り、延髄などを押し出しはじめており、そのために呼吸障害がおきている」とのことであった(朝日新聞十一月十五日朝刊)。

加古川から両親が病院に到着したのは榊嶋君の死亡後であった。十五日午前〇時三十分警察は両親を伴つて遺体を大阪大学法医学教室に移した。

午前二時より松倉教授執刀により司法解剖が行なわれたが、救援センター側は強く要求して上記榊嶋弁護士、佐藤医師および松本健男弁護士が立会った。

解剖は五時半頃までかかつて行なわれた。松倉教授の鑑定書はまだ出ていないが記者に語ったところによると「死因は脳挫傷、つまり撲られて強い脳震盪を起し、脳の表面が傷ついて脳麻痺を起した。傷は鈍器で撲られたものだが、それが何であるかはこの段階で何とも言えない。どの方向から撲られたかなども含め慎重に検討したい」と所見を述べている。(朝日新聞十一月十五日夕刊)

大阪府警は十五日朝、松倉教授の説明とは別にこの解剖結果について次のように発表している。「頭に幅の広いものが当たると見られる脳内出血がある。直接の死因は脳機能障害、脳挫傷、脳腫脹、頭部打撲で頭骨の縫合部に亀裂が入っていた。又、左側頭部に直径十センチぐらいの円形の脳内出血があり、堅い鈍器のようなもので一回ないし二回打たれたのではない。ほかに手足などに約二十カ所の皮下出血が見られた。頭の傷は症状から見て警棒による可能性は薄い」(朝日新聞十一月十五日夕刊)。

これに対して解剖に立会った松本弁護士は、「左側頭部に平行して二筋の条痕があり、そのまわりの頭骨がびび割れしていた。これは短時間に同方向から連続的に衝撃が加えられたことを物語っている。だから鉄棒のように長くても扱いにくいものではない。このような傷をつけることはできない。こうした傷跡からすると警棒の乱打以外に原因はあり得ない」と述べている。

榊嶋君の遺体は解剖終了後両親に引渡され、午前六時四五分加古川の自宅に移された。私たちはこの段階に至るまで警察がす

べてを厳しく管理して、救援センター側の弁護士、医師の接近をことごとく妨げ、顔死の重傷者の当然受けるべき専門医の診療、弁護士接見を不可能にし、その結果、不完全な治療処置によって死に致らしめ、死亡後の解剖の際も不当に弁護士、医師の立会を妨害しようとした不法かつ非人道的な措置を弾劾する。

さて糟谷君の死亡の原因が警察側の逮捕時の暴行およびその後の極めて非人道的かつ不完全な治療処置によるものであることは明白であるが、にもかかわらず、大阪府警はこれに対して全く遺憾の意を表明することなく、その原因究明を怠り、単に推測による説明を場当りの三転四転させ、あたかも加害者は警察ではなく学生集団であるかのように発表して、加害者たる警官をかばい続けている。

十三日夜鈴木貞敏警備部長は「重態だと言われる学生は、午後六時半ごろ、水道局前の火炎瓶闘争の際逮捕し、負傷しているのに気づいて病院に運んだ。けがの原因は調べてみないとわからないが、仮りに警棒によるものだとすると、火炎瓶を使って警

察官を襲う相手を制圧するために警棒を使ったのだら当然だ。この学生のけがをしたときの状況を調べなければ過剰警備かどうかはなんとも言えない」(十一月十三日夜、共同通信)との談話をのべ、暗に警棒による殴打を認める言い方をした。

ところが十四日の段階では「襲いかかってきたグループに対しては警棒をぬき、タテと共に防戦に使っただけで、暴行を働いた事実はない。この被疑者を逮捕し、それを集団で奪い返しにくるという混乱した状況の中で起ったことなので、原因はこれから糾明しなければならぬ」と発表し、傷害致死事件として警備部、刑事部で合同捜査する方針を明らかにした(朝日新聞十一月十五日夕刊)。

糟谷君の負傷について、警察は、原因を正しく把握しない段階から、単なる推測によって恥知らずな捏造的なデマを述べている。

すなわち当初は、「他の学生が投げた火炎瓶が頭に当たったのだ」、あるいは「転倒して舗道で頭をぶつけたのだ」と述べていたが、死亡後それらが状況に合わないことが

わかると、糟谷君を逮捕した際、学生集団が奪い返しに来たので、「隊員の一人が楯で防ぎ、他の二人が糟谷君を押し包むようにして路上に倒れた」(読売新聞十一月十五日朝刊)、「赤松巡査が楯で、他の二人が警棒をぬいて応戦した」(毎日新聞十一月十五日朝刊)と述べ、「その際奪い返しに来た学生の鉄パイプが糟谷君の頭に当たったのだ」と発表した。

そして、さらに押取物件の中に鉄パイプがないことがわかると、その凶器を「鉄板であった」と訂正している。警察側はこのように警棒による殴打ではないという前提をまず立て、死因となった行為を一方的に学生集団側に押しつけて捜査を行なっているのであるが、それが新たな不法弾圧につながることは論をまたない。

警察側のこのような立論が、すべて不当で虚偽にみちたものであることは明らかである。火炎瓶説、転倒説は共にここで論駁の必要はない。学生集団が奪還に行き鉄板で糟谷君の頭部を殴打したという点についてだけ反論しよう。

当日の状況はすでに述べたように学生集

団が約三十名で機動隊に突入したとはいうものの、圧倒的な機動隊の攻撃に会ってたちまち制圧され、個々に分断されて逮捕されており、それを学生集団が奪還に押しつけていくという事実はなかった。もし奪還しようとしたとしても、糟谷君のいる所まで到達する以前に他の機動隊員により阻止される状況であったはずである。この状況設定がまず事実をまげたものである。

さらに、一人または二人の警官が糟谷君を路上に包みこむようにして押し倒し、他の二人または一人の警官が、警棒をぬいて応戦したというが、その前提を正しいとしても、そのような警察側の苦戦の状況の中で路面に組敷かれていた糟谷君の左側頭部が鉄板で重傷を負い、糟谷君の上で押えつけている警官が負傷しなかったということがあり得るであろうか。

凶器に使用したと警察側が推定する鉄板とは幅三十二ミリ、厚さ六ミリ、長さ一三〇センチの扁平棒状のものである。このような鉄板を凶器として使用する際は、刀と同様な持ち方をすると考えるのが妥当であり、それを用いて右から左に強くふりまわ

し、糟谷君の頭部に当たるとするならば、六ミリ幅の部分が頭に当たっており、その傷は当然皮膚に裂傷を与えることが容易に推定される。或いは三十二ミリの扁平な部分が頭に当たるとするならば、医師の所見にあるような棒状の鈍器による二筋の条痕ができるであろうか。いずれの場合も糟谷君の死因となったけがの原因を説明することのできないもので、これらは警察が故意に事実を隠蔽し、空想的事態をでっちあげて学生集団に転嫁し、新たな弾圧を用意した極めて悪質かつ恥知らずなやり方である。

私たちが諸般の証拠や状況を総合して推定する事実は次の通りである。

糟谷君は、機動隊の隊列に最初に突入した集団の中にいた。彼は直ちに荒木幸男、赤松昭雄、杉山時史の三警官に捕えられた。上記の警官は逮捕に際し、他の警官の協力を得て、糟谷君に対し警棒をふるい、もしくは突き倒して、警棒または楯で乱打し、足蹴りする等の暴行を加えた。糟谷君の上肢等に十数カ所の打撲傷があったこと、左側頭部に死亡の原因となった打撲傷があったことがそのことを物語っている。

事実は明白である。糟谷君はまさしく彼を逮捕した三名の警官およびそれに協力した警官たちが、警棒や楯をもって過剰かつ不法な暴行を加え虐殺したものである。

警察側が権力をかきにきて事実を隠蔽し逮捕に当たった警官の凶暴な犯行を学生集団に転嫁して、新たな弾圧の材料をでっちあげようとする卑劣かつ悪質なやり方を許してはならない。真実は一つしかない。しかも尊い人命が奪われたのである。この厳肅な事実を詳細に正しく究明することは社会的にも人道的にも絶対ゆるがせにしてはならないものである。

# 統一

再刊準備版

発行：共産主義労働者党全国協議会

「統一」（再刊準備版）は、新たに「三里塚廃港決戦に勝利し、革命アジアと結ぶ日本人民の解放の根拠地を創造しよう！」のスローガンを掲げ、日本の革命、社会主義の路線、新たな党の創成を模索する“百花斉放”を喚起する役割を果そうとしています。

「統一」は、三里塚空港廃港への志を同じくする“人の和”の絆です。

「統一」を手に入れた全ての皆さんに定期購読を訴えます。

戦士は土の下でもなお詩い続ける

（発行）糟谷孝幸同志虐殺弾劾10周年追悼集会実行委員会

大阪市北区同心2の15の11 河ビル202

TEL. 06(353)8143

¥300

御講読は

東京都千代田区富士見2-8-5

山京ビル別館3F 工人社

03(264)4195

大阪市北区同心2-15-11 河ビル202

関西工人社

06(353)8143



中國電力建設出版社  
2023-12  
641818  
0034